

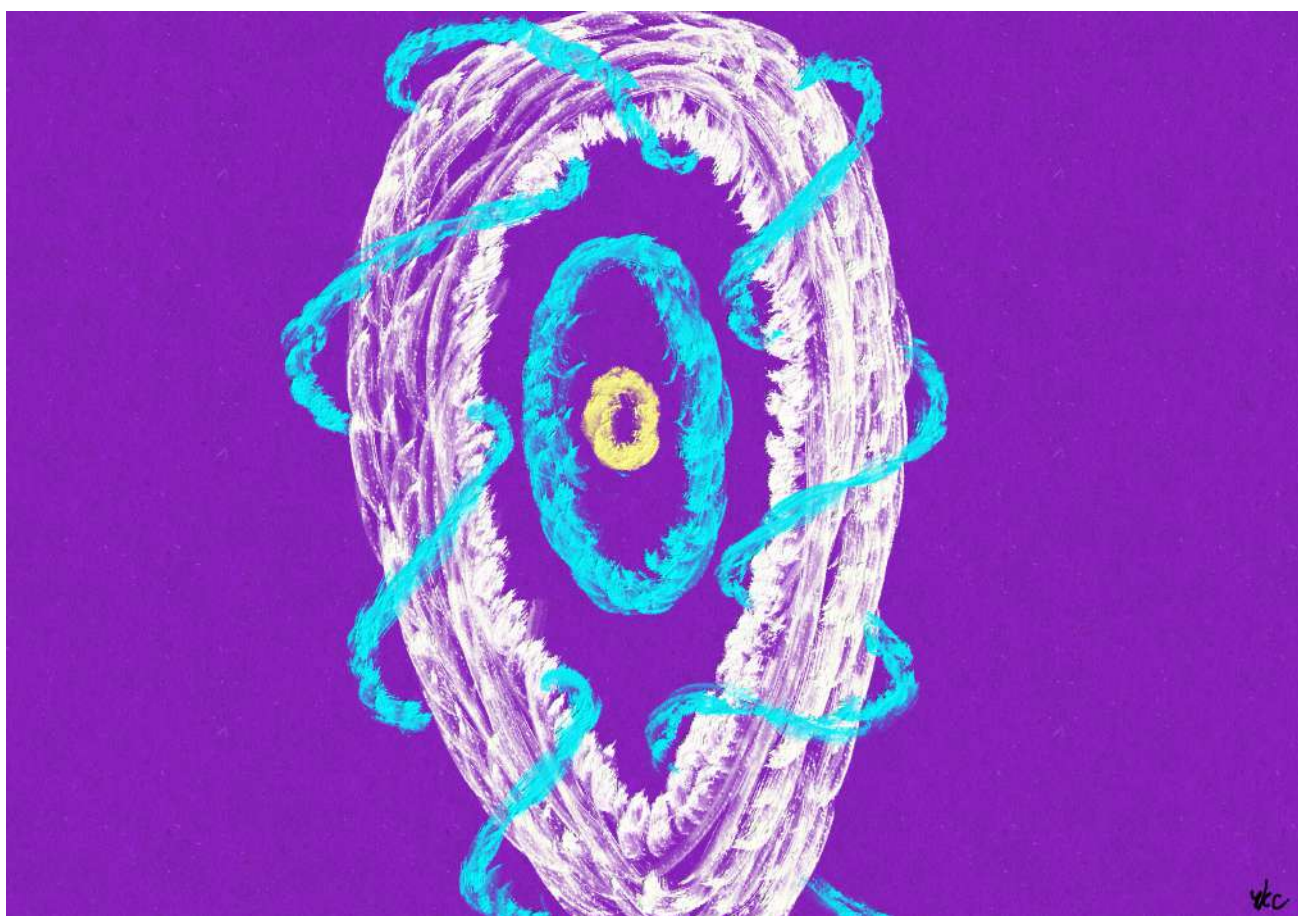
---

# 発達理論の学び舎

Back Number: Vol 306

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」

---



No.1156 メタリアリテイへ\_Toward the MetaReality

---

## 目次

- 6101. 自由と非二元
- 6102. 今朝方の夢
- 6103. かかりつけの美容師メルヴィンとのシンクロシティ
- 6104. オランダの家と日本の家の窓より
- 6105. 自己を形成し、自己を養う瞬間瞬間の具体的特異性
- 6106. 今朝方の夢
- 6107. 今年最後の夏らしい日:ルーワーデン訪問計画
- 6108. 学習や発達的要諦と不在の不在化
- 6109. 今朝方の夢
- 6110. 変容的な学習と実践的要諦:非二元と自発性の観点より
- 6111. 夏の終わりを告げる雷雨:今朝方の夢
- 6112. 本当の豊かさを求めて:フィンランドへの移住について
- 6113. 夏の終わりの扇風機の恩恵:フィンランドのピアノ曲
- 6114. フィンランドへの移住に向けて
- 6115. 今朝方の夢を受けて1年振りに行ってみたこと:メタディスコースの構築
- 6116. 半法則(demi-laws):厚生経済学への関心
- 6117. “underlaboring”をしていく試みと今朝方の夢
- 6118. 一次元的世界における芸術
- 6119. フィンランドの作曲家の楽譜を見つけて
- 6120. 今朝方の夢

---

## 6101. 自由と非二元

時刻は午前7時を迎えようとしている。今日は午後から、かかりつけの美容師のメルヴィンの店に行き、髪を切ってもらおう。予約の時間が午後3時からなので、自宅を2時40分頃に出発し、ゆっくりと歩いて店に向かおう。今日のメルヴィンとの話はまず、先日のアテネ旅行の話になるだろうか。メルヴィンに髪を切ってもらった後に、街の中心部の銀行に立ち寄り、モバイルアプリの初期設定に関して問題が発生しているので、それについて問題解決を依頼しようと思う。

昨日もいくつか雑多なことを考えていた。1つには、ルソーの自由に関する指摘を受けて、多くの人は自由であることを根底では恐れているのではないかというものだった。

ルソーはかつて、人は本質的に自由だが、生まれてから成人に至る過程の中で、制約に満ち溢れた環境で過ごすことを通じて不自由になってしまっていると指摘している。そこから、多くの人たちはおそらく制約に慣れ切っており、仮に自由を与えられたとしても、どのように振る舞っていいのかわからないのではないかと思った。それはまるで、野生の鳥が檻に入れられて飼い慣らされ、ある日突然檻から出ることを許されても、檻の外に出ていかない姿を彷彿させる。この社会は檻だけなのだが、その檻は絶えず開いていることもまた確かだ。

檻は社会的に構築された構成概念として目には見えない力として絶えず働いているが、その檻は実は開放されており、檻の外にいつでも出れることを忘れてはならない。多くの人たちは、自由であることを許容されているのだが、あえて慣れ切った不自由さを選んでいるのではないだろうか。そしてその根底には、不自由さから脱却して自由であることへの根源的な恐れのようなものがあるように思えてくる。

そのようなことを考えながら、昨日のオンラインミーティングの時に言葉として出てきた「非二元」の話に思考が及ぶ。存在の基底としての非二元の状態、それは自由の状態と感覚的にとても近い。というよりも、非二元は絶えず自由であり、自由は非二元であるとすら思える。いや、自由というものを措定した瞬間に、その対極に不自由というものが想定されてしまうことになるので、非二元は自由の性質を持ちながらも、同時にそれを超えているものなのだろう。

---

非二元の体験は何も特別なことではない。哲学者のロイ・バスカーも指摘しているように、音楽に聴き入ったり、空をぼんやりと眺めることを通じてその状態を体験することができる。多くの人が自由を与えられても右往左往してしまうのは、そもそも自由の体験を味わうことが過去において極端に少なかったからかもしれない、また現在においてもそうした体験を味わうことができていないからかもしれない。

非二元は絶えずこの瞬間にあって、私たちはいつでもその状態に至ることができる。存在の基底にいつでも触れることができるのだ。それはつまり、いつでも私たちは自由の状態に触れることができ、それが常態化されれば、絶えず自由でいることも可能なのだ。少しずつ非二元的自由の体験を積むこと。解放の体験を徐々に味わっていくこと。そうしたことが大切なかもしれないということを考えていた。フローニンゲン:2020/8/11(火)07:06

## 6102. 今朝方の夢

時刻は午後7時を迎えた。もう少し日記を書いてから、創作活動と読書に取り掛かり始めようと思う。昨日考えていたその他のこととして、統計的なデータや統計的な解釈が成り立つ次元に関するものである。それはイギリスの哲学者ロイ・バスカーの3層構造のリアリティの捉え方で言えば、経験的な領域の1つ上の階層である“the actual”の階層に該当する事柄のように思えた。つまり、科学的な研究が往々にして立脚している統計分析というのは、“the actual”のさらに上の階層にある“the real”、つまりは現象のメカニズムや背後の力については何も説明してくれないのではないかということである。統計分析というのは、一番下の階層である“the empirical”な階層のデータを集め、そのデータに対して数的処理を施すという“the actual”の階層構造での営みに留まることを改めて考えていた。

それでは今朝方の夢について振り返り、いつものようにライフワークに取り組んでいこう。夢の中で私は、卒業した中学校の同窓会に参加していた。その同窓会は一風変わっていて、2年おきに1回、同窓生と一緒に海外旅行することになっていた。もうすでに子供がいる友人たちも多いのだが、子供と一緒に海外旅行を兼ねた同窓会に参加する者もいた。私の記憶はもう定かではなくなっていて、直近では、イギリスに訪れたらしく、ボートで川下りをした写真が残っていた。翌年は、オーストリアのウィーンを訪れ、そこで芸術に触れるという海外旅行が実施された。さらには北欧に行く

---

旅行もあった。卒業してもう随分と経つのだが、毎回の海外旅行を兼ねたこの同窓会には多くの友人たちが参加していた。

気がつけば、私はその年の同窓会に参加していた。そこはヨーロッパのどこかの国だった。ちょうど私は、豪華なホテルの入り口付近に立っていて、友人たちが到着するのをそこで待っていた。すると、遠くの方から数名の友人たちが歩いてくる姿が見えた。本来はこの同窓会は同じ中学校を卒業した者だけが参加できるのだが、歩いてくる友人の中に違う中学校を卒業した高校時代の友人 (TS) がいた。他の全ての人たちが同じ中学校を卒業しているためか、彼は少し照れ笑いを浮かべながら合流をした。

彼を含め、今到着した友人たちと一緒に早速ホテルに入り、チェックインをしようと思った。ところがチェックインをする前に、ホテルの地下の駐車場を見学しに行こうということになった。そのホテルには、地下1階から地下3階にわたって駐車場がある。一番下の駐車場は変わった作りになっているとのことだったので、私たちはエレベーターを使ってそこに向かった。

地下3階に到着すると、どういうわけか私はまだエレベーターに残っていて、私以外の友人たちはエレベーターから降りて、その場をうろつき始めた。すると突然、駐車場のどこかから、私たちに対する警告の連絡があった。おそらく監視カメラがそこにあっただろうと思われ、友人たちは不審者のように思われたようだった。一刻も早くその場を立ち去らないと罰金が課され、同時に自国に強制送還されるとのことだった。それはとても理不尽な仕打ちのように思えたが、私たちはその警告に従うしかなかった。

ところが、友人たちはその警告を気にせずに駐車場の奥へ奥へと進んでいった。彼らはもう私の声の届く範囲外にいたので、しょうがなく私はエレベーターを使ってグランドフロアに向かった。するとそこで私の体は瞬間移動し、その街を走るバスの中にいた。バスには乗客は私以外誰もいなかった。

バスはすぐにあるバス停で止まった。そこには2人の友人がいて、彼らもこのバスを利用するつもりでいるようだった。ところが、2人のうち1人は私の手違いでバスに乗ることができなかった。バスを停車させておく時間をコントロールできるのは私の心のものであり、そのコントロールを少し誤り、前で

---

待っていた友人をバスに乗せることができたのだが、後ろで待っている友人に乗せることができなかったのである。バス停で取り残されたのは高校時代の友人であり、彼は少しばかり苛立ちと寂しげな表情を浮かべてその場に立ちすくんでいた。今朝方はそのような夢を見ていた。

そう言えばその他にも、この夢のどこかのタイミングで、空港にいる場面もあったことを思い出した。その空港はとても広く大きかった。理由は不明だが、私は見知らぬ外国人女性から、ラウンジが利用できるカードが付いた腕時計を受け取り、フライトの時間までラウンジにいることにした。ラウンジに到着すると、その受付の外国人女性が突然日本語を話し始めた。

彼女の日本語はとても流暢だったのだが、その時の私の思考は英語空間にあり、彼女の日本語が全く理解できなかった。というよりも、それが日本語であるということを認識することもできず、彼女は自分の知らない外国語を話しているとすら思っていた。

私は、ラウンジの利用のルールについては知っていたので、彼女の日本語を理解しているフリをして、すぐにラウンジの利用を始めようとした。すると、私の持っているカードでは反対側のラウンジしか利用することができないらしく、そちらのラウンジはあまりサービスが良さそうではないと雰囲気からわかったので少し残念だった。とは言え、ラウンジを利用できるだけでも有り難いと思い、ラウンジのバーカウンターで飲み物を注文しようとした。すると、注文から受け取りまで時間がかかりそうだったので、注文するのをやめ、ふと左を見ると、そこに街中にあるキオスクの売店があることに気づいた。

その売店には飲食物だけではなく、雑誌や雑貨を含めていろいろなものが売られていて、それらが積み重ね上げられていた。店主は高い位置から顔だけこちらに覗かせていた。私の前の数名の客が注文を終えるのを見計らって、私はブラックコーヒーを注文した。見知らぬ外国人女性からもらったラウンジ利用のカードのサービス対象として、その売店では飲み物と1つ食べ物ももらえるらしかったが、あまり良さそうな食べ物がなかった。果物に関しても、それらはオーガニックなものではないことが外見上明らかだったので、とりあえず私はコーヒーだけを注文した。コーヒーを受け取り、時刻を確認すると、もうフライトの搭乗時間15分前になっていることに気づいた。コーヒーを飲み終えてから搭乗口に向かうと間に合いそうになかったため、私はコーヒーを持ったまま搭乗口に向かうこ

---

とにした。ラウンジの外は、どこか銀河空間の中のような雰囲気だった。フローニンゲン:2020/8/11  
(火)07:45

### 6103. かかりつけの美容師メルヴィンとのシンクロシティ

時刻は午後7時半を迎えようとしている。先ほど夕食を摂り終え、少しばかり夕涼みをしていた。書斎の窓に比べて、寝室の窓からの方が風が入ってくるため、そこで夕方の涼しい風を浴びていた。今、ゆっくりと夕日が西の空に沈んでいる。

今日は午後に、かかりつけの美容師のメルヴィンの店に行った。店に入ると、メルヴィンが足を引きずりながらトイレから顔を出した。どうしたのかと尋ねてみると、数日前にボルダリングをしているときに足を捻ってしまったらしい。医者からは2週間ほど歩けなくなるだろうと言われていたそうだが、メルヴィンはそれを鵜呑みにしてしまうと本当に2週間歩けなくなると判断したらしく、医者意見に従わず、自らの意思の力を用いてより早期に回復させるつもりだと笑顔で述べていた。

その時の状況を詳しく聞くと、どうやらメルヴィンはその日はもうボルダリングを切り上げて自宅に帰ろうと思っていたらしいのだが、ジムの知り合いから声を掛けられ、より難易度の高い壁を最後にもう1回登ることを促されたそう。その時にメルヴィンの内側の声は、「もう帰った方が良い」と述べていたらしいのだが、その声を無視して難易度の高い壁に挑んだところ、壁から引き剥がされ、着地時に足を強く捻ってしまったそうだった。そこから私たちは、他者の声に惑わされず、自分の内側の声に従うことの大切さを再度確認し合った。

そこからはいつものように話が弾んだ。もちろんアテネでの例の一件も話題に挙がったが、それよりも盛り上がったのは、ここ最近お互いに起こったシンクロシティについてである。まず話題を切り出したのはメルヴィンだった—いつも私たちは髪を切る前に随分と話し込むため、メルヴィンはいつも私のために通常客の2倍の時間を取ってくれている—。

**メルヴィン:**「ヨウヘイ、実はここ最近やたらと数字の「3」に出会うんだ。前々から数秘学に関心があり、3の意味を調べていると、色々と発見があつてね」

**私:**「えっ、メルヴィンも数字の「3」に意味があると感じてるの？」

---

メルヴィン:「えっ、ヨウヘイもそうなのか？」

私:「うん、そうなんだ」

その偶然に嬉しくなり、私は思わずメルヴィンに右手を差し出し、握手を求めた。

メルヴィン:「うわっ、なんだ！」

私:「どうしたの？」

メルヴィン:「ヨウヘイの手からとんでもない気が出てるぞ！ほらっ、ここを見て」

メルヴィンは自分の右腕を指差してそのように述べた。

私:「あっ、鳥肌になってるね！そんなに気が出てた？」

メルヴィン:「いや、驚くほどに出てたよ」

実はメルヴィンはエネルギーを感じることに敏感であり、私たちはいつも気の話や霊性の話をする。以前メルヴィンは、「これは誤解されると嫌だから誰にも見せてないんだけど、ヨウヘイに見せたいものがあるんだ」と私に述べ、ある動画を見せてくれた。動画に映っていたのは今から10年以上も前の青年姿のメルヴィンだった。メルヴィンがある気功の師匠に師事していた時に、遠くから気を送ってへちまのような瓜科の太い野菜を見事に切り落とす姿が映し出されていた。

私はそれを見て驚いたが、そうした現象が起こることは何も不思議ではないと思っていたので、メルヴィンもそれを知ってその動画を私に見せてくれたのだった。そのようなことを思い出しながら、メルヴィンは私と握手した時にとんでもないエネルギーを感じたとのことだった。おそらくそれは、ファスティングによって身体エネルギーが高まったからなのだと思う。メルヴィンもここ最近身体エネルギーの上昇と霊力の向上を感じていたらしく、私も霊力の高まりを感じているところだったので、その話でも後ほど盛り上がった。



---

数字の「3」については、ちょうどつい最近の夢の中に出てきたシンボルであり、私はそれを「真善美」の3領域として解釈し、それが今の自分にとって大切な探究・実践領域であることをメルヴィンに告げた。メルヴィンは「なるほど」という表情を浮かべて頷き、メルヴィンは今、自分にとって「3」という数字が何を意味するのか探している最中だという。不思議なことに、スーパーで偶然すれ違った女性が「33」と呟いていたり、その他にも街中でやたらと3の数字が自分の目に飛び込んできているとのことだった。確かに、ひとたび自分の意識が3という数字に向かえば、日常世界の中に3という数字は溢れているだろうから自分の目にその数字が飛び込んでくるのはわかる。

しかしながら、メルヴィン曰く、そうした意識をしていない時にもふとした時に偶然にも3という数字と出会うということを述べていたのでとても興味深い。3という数字が人生の中で何か重要な役割を果たしていることと、身体エネルギーや霊力の最近の高まりなど、メルヴィンと私の人生にはシンクロシティが起きていると語り合った。

その他にも今日は、集合意識や最近のコロナを含めた世界の異常な情勢について意見交換をし、あっという間に1時間が経った。ちょうど1時間が経つころに次のオランダ人の若い男性客が店にやってきたが、最後に私は、メルヴィンが捻った左足の足首に霊気を施術した。メルヴィンに髪を洗う椅子に腰掛けてもらい、そこでお互いに呼吸を整え、気を送ると、メルヴィンの左足がピクンと反応し、そこでも自分の気力の高まりを感じた。店を出る前にメルヴィンともう一度握手をし、メルヴィンの足が早く治ることを祈りながら、夕方の晴れ渡るフローニンゲンの空を仰ぎ見た。フローニンゲン：2020/8/11(火) 19:58

#### 6104. オランダの家と日本の家の窓より

時刻は午前6時半に近づこうとしている。今、寝室の外の方から小鳥たちが高らかな鳴き声を上げている声が聞こえてきた。その音に耳をそっと傾けている。今朝方5時半頃に起床した時、寝室の窓の外には真っ赤な朝焼けが広がっていた。その美しさに思わず息を飲み、ベッドのへりに腰掛けて、しばらく朝焼けを眺めていた。

今、穏やかなそよ風がフローニンゲンの街を吹き抜けている。どうやら晴れの中で気温が30度を越すのは今日が最後になるようだ。天気予報を確認すると、今日の最高気温は31度とのことだが、空

---

にはうっすらとした雲があるようなので、それほど暑さは感じないだろう。リビング、書斎、そして寝室の窓を少しばかり開けて風を通せば何の問題もなく過ごせるだろう。

そういえば、日本では大抵窓の内側に網戸があって窓を全開にしても虫などが入ってこないようにできるが、オランダの家の窓はそうではない。網戸などないのだ。だから虫が入ってくることを心配するのならば、窓を全開にすることはできない。

昔、窓を全開にしていると、よくハチのような虫が入ってきたことを思い出す。また、窓を全開にしまうと、うちの場合は、窓辺にやってくる小鳥たちも間違っって部屋に入ってきてしまう恐れがあるので、今は窓に隙間ができるぐらいにしか開けていない。日本には網戸があって、オランダには網戸がないという家の作りに関して、それは機能上の問題として片付けるのではなく、文化的な差異もそこにあるのかもしれないと思った。オランダではひょっとすると、うちと外の境界線が日本より希薄なのかもしれない、外側の世界と家の世界がつながっていて、それらの間に過度に仕切りを設けないうために網戸のようなものがないのかもしれないと思った。

日本では、家は家として外の世界を区切るような形で建てられるのに対して、オランダの家はあくまでも外側の世界の一部として、つまり融和関係かつ共存関係の発想を根幹に持って建てられているのかもしれないと思った。それは単なる私の仮説だが、その仮説はこの4年間オランダで生活するという直接体験に基づいて生まれたものであり、あながちおかしな仮説ではないように思えてくる。

昨夜、かかりつけの美容師かつ友人のメルヴィンにメールを送った。髪を切ってくれたお礼に合わせて、彼が近々ファスティングをするということだったので、ファスティングに関する2冊の書籍を勧めた。またそれだけではなく、メルヴィンとはいつも霊性を含めて、種々の思想的な話をするので、ここ最近私が探究をしているロイ・バスカーの書籍と、ケン・ウィルバーの書籍を勧めた。ウィルバーの書籍に関しては、もう1冊勧めたい書籍があることをメールを送った後に気づいたので、その書籍については今夜またメールで伝えておこうと思う。

その他にも、メルヴィンがエネルギーワークにも関心を持っていて、先日偶然にも霊気の実践者と知り合ったそうだった。そのオランダ人女性の実践者の名刺をメルヴィンが持っていて、それを私に

---

見せながら、彼女は霊気以外にもいろいろなセラピー技法を学んでいると説明してくれた。メルヴィンがエネルギーワークについて関心を持っていることがわかったので、クラニオセイクラルバイオダイナミクスの動画も2つほど紹介した。メルヴィンがファスティングを行い、さらにはバスカーやウィルバーの書籍を読むことを通じてどのように変化をしていくのか楽しみだ。昨日のメルヴィンとの対話を受けて、私も数秘学と占星学にも関心の輪を広げてみようかと思う。フローニンゲン:2020/8/12 (水)06:44

### 6105. 自己を形成し、自己を養う瞬間瞬間の具体的特異性

時刻は午前7時に近づきつつある。今日もとても穏やかな朝の世界が広がっている。小鳥たちの鳴き声がいつも以上に静かに聞こえる。ここから少しずつ気温が上がっていくのだろうが、どこか秋の朝の雰囲気すでに滲み出てきている。

昨日、ふとヘルシンキの気温を確認すると、やはりフローニンゲン以上に涼しいことがわかった。ヘルシンキでは、夏の間でも30度を越すことは本当になく、20度前後が最高気温になっている——気温が高くても25度だ——。ヘルシンキの涼しさを思いながら、今後はヘルシンキ郊外に住むことを検討してみてもいいかもしれないと思った。

昨年の秋に日本に一時帰国したのは9月下旬であり、その時にヘルシンキ空港を経由したのだが、その時の気温がもうマイナスだったことに驚いたのを覚えている。そこから日本に到着し、日本ではまだ半袖を着て過ごしていたことが懐かしい。今年は昨年よりも3週間遅く日本に行くことにし、その時は日本は随分と涼しくなっている頃だと思うが、その分オランダは寒くなっている頃だ。今年のは行きはロンドン経由、帰りはヘルシンキ経由なのだが、どちらにせよ日本との気温差には注意しようと思う。

昨日、その瞬間の感覚を含めた、その瞬間の諸々の出会いの大切さについて考えていた。刹那の大切さ。ヘラクレイトスが残した「誰も同じ川に二度入ることはできない」という言葉や、ニーチェの「永劫回帰」の思想において、私たちは2度と同じ瞬間に立ち会うことができず、2度と同じ体験をすることができないことを説いている。それらの発想と、ロイ・バスカーの「具体的特異性 (concrete singularity)」という概念は通じるものがある。

---

私たちは、人間という普遍性を兼ね備えていながらも、1人1人は代替の聞かないほどにユニークな存在であり、そこには差異がある。バスターは、そうした私たち1人1人の固有性に対して具体的特異性という言葉当てている。そうした具体的特異性を持つ私たちの瞬間瞬間の感覚や思考というものもまた具体的特異性を持っていることに気づく。どうやら一瞬一瞬は具体的特異性の現れであり、それは自分の具体的特異性を映し出すものでもあるのだということがわかる。

日々この目で見えるもの、この耳で聴くもの、肌で感じられるもの、それらの全てが具体的特異性を持っていて、同時にそれらの全てが私たちを形成していく。何を見て、何を聞き、何に触れるのか。私はできる限り、自分を涵養してくれるものと交流し続けたい。

私たちを形成し、私たちを養ってくれるのは、瞬間瞬間の具体的特異性なのだ。できるだけ美しく善きものを自己形成・自己涵養のために取り入れていきたい。そうではないものが世の中にたくさん溢れていることは一目瞭然であり、そうであればそれらを少しでも美しく善きものにしていこう。そうしたアクションもまた具体的特異性の産物であり、それもまた自己を形成し、自己を育むことにつながるだろう。フローニンゲン:2020/8/12(水)07:12

#### 6106. 今朝方の夢

時刻は午後7時を迎えた。今、朝日が赤レンガの家々を照らしている。

アテネから戻ってきて以降、フローニンゲンは天気が良く、気温も上がっていた。ところが明日からは一気に天気が崩れ、雷が伴うような雨が1週間ほど毎日降るらしい。その期間とそれ以降はもう気温が下がっていく一方であり、今年において夏らしさを感じられたのは1週間あるいは10日ほどだったように思う。それでも今年は、短い夏の命を十分に味わったように思う。1つ1つの季節と深く向き合っていくこと。季節の深部に触れながら、自己の人生の季節の深部に触れて生きること。それを絶えず忘れずに日々の暮らしを営んでいく。

今朝方はいくつか印象に残る夢を見ていた。夢の中で私は、現在サッカーのスペインリーグで活躍するある若いサッカー選手と、彼が所属するクラブチームのグラウンドで話をしていた。それはサッカーの練習に取り組む姿勢に関する事柄であり、私はその話題に対して発達科学や学習科学の観点から話をしていた。その選手はまだ成人前なのだが、とても知性が高く、それに加えて人格形

---

成もしっかりなされている。そのため、彼は自分の考えを物怖じすることなく私に述べ、2人の間で真の対話のようなものが形成され始めていた。途中でお互いに考えの合わないことがあったのだが、その時には彼が突然スペイン語を交えて話し始め、それに対して私は英語で「日本語を話してくれ」と伝えたことを覚えている。

次の夢の場面では、私は幼少の頃に住んでいた社宅の寝室にいた。寝室の布団の上に横たわり、天井をぼんやりと眺めていると、誰かの両親が殺害されたという知らせが脳内に入ってきた。その知らせは、まるで自分の両親が殺害されたかのような感覚が伴っていた。残されたのは1人息子だけであり、彼が裁判を起こせば、少なくとも1人あたり2億8千万円の損害賠償が得られ、2人合わせて5億6千万円のカネが得られるとのことだった。それを聞いて私は、カネで解決するような話ではないと思った。そこで夢の場面が変わった。

最後の夢の場面では、見慣れないビルの屋上にいた。ビルの屋上に特設ステージが設けられていて、ステージ上に、予備校時代にお世話になっていたチューターがいた。そのチューターの横には数名ほどの見知らぬ人たちがいた。チューターはとても楽しそうな表情を浮かべていて、これから行うパフォーマンスに向けて張り切っているのが伝わってきた。

いざパフォーマンスが始まると、チューターは会場にいるであろうある女性のアナウンサーの名前を呼び、彼女をステージ上に招こうとしていた。しかし、名前を呼ばれたアナウンサーはその場にいなかったらしく、次にチューターが名前を呼び上げたのはなんと私だった。自分の名前が呼び上げられた時に、私は少しキョトンとしてしまったが、パフォーマンスに加わるのはとても楽しそうだったので、私は意気揚々とステージ上に上がった。その際に、フラッシュライトのようなものをたくさん浴びせられたので、私は目をつぶってステージに上がり、ステージ上でもしばらく目をつぶったままにしていた。

すると、ステージ上にいたある小柄な老婆が、私に対して突然クイズを出してきた。クイズの内容は、「チューターがここ最近休日に始めたことを2つ答えよ」というものだった。私は即座に、「料理と掃除」と答えると、それはあっけなく正解であり、ステージ上での私の役割は終わった。すると、ステージ上で何か目には見えない2人の人間がボクシングをしていることに気づいた。その戦いがヒートアップしてきたところで、ようやく2人の姿が肉眼で見えるようになった。

---

見ると、2人は小中学校時代の私の友人(SI & MS)だった。彼らは冷静な表情で殴り合っているのだが、どうやらそのルールはデスマッチのようだった。相手が倒れるまで試合が続き、勝った方は負けた方が賭けたカネをもらえることになっていた。なんと友人の一方(MS)が全財産を賭けたらしく、私はそれを心配に思いながら2人が闘う様子を眺めていた。私の心配は的中してしまい、結局全財産を賭けた友人は闘いに敗れてしまった。そんな彼を見て、私は何か助けになることができないかと考え、とりあえず彼に話しかけた。今朝方はそのような夢を見ていた。どれも印象に残る夢だった。フローニンゲン:2020/8/12(水)07:33

### 6107. 今年最後の夏らしい日:ルーワーデン訪問計画

時刻は午後7時半を迎えた。今、穏やかな夕日がフローニンゲンの街を照らしている。

今日は天気予報を超える形で気温が33度まで上がった。午後買い物に出かけた際にはさすがに暑さを感じた。木陰に入るとそよ風に涼しさを感じることはできたが、いかんせん連日の猛暑により地上に熱が残っているかのようであった。しかしながら今日はこれから気温がどんどん下がっていき19度ほどまで下がる。そして明日は午前中から雨が降るようであり、そこからは連日の雨により、気温が下がるようだ。そのため、夏らしさを感じられたのは今日が最後となる。

自分の中では、アテネの滞在を含めて、思う存分夏の暑さを今年は満喫することができたように思う。もちろんそれによって得られた恩恵はあったが、来年からは例年通りに北欧に滞在しようと思う。来年は、フィンランドでまだ訪れたことのない街に行ってみようかと思う。今後ひょっとしたらフィンランドで生活を営む可能性があり、それに向けてフィンランドを色々と散策してみようと思う。

ここまで日記を書き留めたところで、夕涼みのために寝室に向かった。やはり夕食を食べた後は体温が上がっていて、汗がしたたってきた。寝室の窓からは夕方の涼しい風が流れ込んできやすいので、昨日と同様に、そこで少しばかり夕涼みをした。ヴァン・ゴッホ通りの方を眺めて、遠くに見える緑を眺めたい。

今日は、一昨日に書き上げた原稿を再度確認し、加筆修正をして先方に提出した。ここからまた加筆修正の依頼があるかもしれない。それに対しては柔軟に対応しよう。今日はその他にも、「一瞬一生の会」の補助音声教材を作っていた。今のところ合計で4つの音声ファイルを作成し、合計で1時

---

間半弱ほどの時間になっている。ここからまたもう1つだけ音声ファイルを作成し、後は今週末に作成しようと思う。

今朝方ハーグに住む友人の日記を読んでいると、先日のアテネの件で連絡をしたことが書かれていた。その中で、「大切な人たちと話をすること、ときに楽しく、ときに真剣に向き合うことができるように予定をあまり入れないようにしている」という記述を見かけ、そのあり方はとても素晴らしいと思った。私も日々予定をほとんど入れないようにしているのだが、その目的というのは常に自分の創作活動や探究活動に自由に時間を充てるためになっているように思え、友人のあり方に見習うところが多分にあると思った。

その友人が来月フローニンゲンにやって来る。どうやらフローニンゲンに1泊することにしたらしく、翌日は先日自分の日記でも言及したルーワーデンに足を運ぶとのことであり、私も翌日の午後からルーワーデンに行き、現地で落ち合うことにした。ルーワーデンを調べてみると、美術館や博物館が結構いろいろなものがあり、その中でも1つ訪れてみたい美術館が見つかり、昨日そこで待ち合わせるのはいかがでしょうかとメールを友人にした。

街の中心部から少し外れたところにある公園の近くに、Pier Pander (1864-1919) というフリースランド出身の著名な彫刻家の美術館がある。私はあまり彫刻に造詣が深くないが、せっかくなのでここも1つ候補地に入れておこうかと思う。フローニンゲン:2020/8/12(水) 19:49

#### 6108. 学習や発達の要諦と不在の不在化

時刻は午前6時半を迎えた。幸いにも昨夜から気温が下がり、夜は寝室の窓を開けていればずいぶん涼しさを感じて寝ることができた。

今、フローニンゲンの上空には少しばかり雲がある。昨日の天気予報では、今日は午前中から雨が降る予定だったのだが、どうやらそれがずれ込み、夕方から雨になるようだ。それに伴い、今日も夕方までは気温が上がり、最高気温は30度に達するそうだ。この7日間の経験上、最高気温が30度であればそれほど暑くない。体感として、外気が32度を超えてくると、部屋の中の気温も随分上がり、暑さを感じる。30度を超える夏は今日で見納めのようなのであるから、夕方までの短い時間に感じられる夏を十分に満喫したい。

---

夕方からの雨をきっかけとして、ここから5日間は連続で雨マークが付されており、1日の中の多くの時間帯に雨が降るようだ。私としてはこの7日間十分に夏を感じることができたので、早く気温が下がって欲しいと思っており、ここから雨が降ることによって気温が下がることはとても喜ばしい。雨のおかげで、最高気温は軒並み25前後、最低気温は15度ぐらいになっている。それであればとても過ごしやすいはずだ。

昨日の日記で書き留めていたように、夏の暑い時期は北欧で再び過ごすことにしたい。フローニンゲンで気温が上がるのは多くても7日間から10日間ほどだということが改めてわかったので、それくらいの期間北欧諸国で滞在することにしたい。ただし、例年暑い日がやってくるのに若干のズレがあるので、どのタイミングで北欧に行くかを選択するのは難しいが、おおよそ8月の第2、3週に気温が上がる日が出てくると思われるので、それを目安にしたい。

昨日もまた雑多なことを考えていた。日本に住むヨガの実践者の知人のブログを読む中で、興味深いことが書かれていた。「ヨーガは、かつて一度も知らなかった智慧を新たに獲得するのではない。人という存在にそもそも初めから備わっていたものを覆い隠している何かを取り除き、求めていたものが既にそこにあったことを思い出していくことを促すものである」という内容の言葉だった。

自分の内側の真実や潜在能力を含め、そうしたものが覆い隠されてしまい、それらのベールを取り除いていくこと。それはまさに、イギリスの哲学者ロイ・バスカーが述べた「不在の不在化」という考え方に他ならない。学術的な知識も実践も、本来はそうしたベールを取り除き、私たちに解放に導くことに資する役割を果たすものである。今日の探究活動もまた、個人や社会を覆うベールの特定とそこからの解放に資するものにしていく。

学習や発達の要諦は、包み込まれたものを紐解くということ(unfolding the enfolded)。ここでもまた不在の不在化という考え方が大切になる。学習においては無知のベールを脱いでいくこと、そして発達においては未熟さのベールを脱いでいくことが求められる。また両者に共通して、社会的に構築された虚偽に気づいていくことも大切だ。昨日はそのようなことを考えていた。フローニンゲン：

2020/8/13(木)06:58



---

## 6109. 今朝方の夢

時刻は午前7時を迎えた。今朝は少しばかり雲があるので、燦々と輝くような朝日を拝むことはできず、ほのかな朝日が遠くの方に見える程度だ。しかしその分涼しさを感じられることは有り難い。そよ風も少しばかり吹いていて、それが地表の熱を洗い流してくれているかのようだ。

今日もまた創作活動に打ち込み、読書に励みたい。昨日は原稿の執筆や音声ファイルの作成などがあったため、創作活動と読書に充てる時間を随分と抑えた。今日は一転して、創作活動と読書に多くの時間を充てていこうと考えている。14冊ほどのロイ・バスカーの書籍もあと1冊と少しとなった。今取り掛かっている書籍は今日の午前中に読み終えるだろうから、残りの1冊は今週中に読み終えることができそうだ。

近日中に日本からクレジットカードが届く予定なので、それが届き次第、9月に読み進めていくための書籍を大量注文しようと思う。主なものとしては美学に関する書籍、そしてシュタイナーの経済思想に関する書籍を購入する予定だ。

それでは今朝方の夢について振り返りたい。夢の中で私は、日本のどこかの街の空を飛んでいた。その街は少しばかり奇妙な建物が多かった。一見するとゴミ屋敷のようなゴミゴミとしたマンション群が所狭しと建っていた。それらのマンション群のベランダには植物が生えていて、植物のツタが無数に絡み合っていた。

あるマンションの上層階近くを飛んで移動していると、ベランダからある中年男性に声を掛けられた。その男性の歳は65歳ぐらいであった。その男性は、私が空を飛んでいることに対して突然非難を始めた。何やら、空を飛ぶことによってコロナウィルスが飛び散るとのことだった。その批判は随分と的外れのものだと感じ、私は空を飛んでいる事情について説明した。しかし、その男性の頭は相当に固く、こちらが何を言っても聞き耳を持っていなかった。そうしたこともあり、私はその男性が言うことを無視して、引き続き空を飛んだ。

すると、その男性が警察かどこかに通報したらしく、地上ではパトカーのサイレンの音が鳴り響いていた。私は少し面倒なことになったなと思ったのと同時に、あの中年男性のように、あのような馬鹿な批判をする人が日本にはたくさんいるのだろうと思って残念な気持ちになった。

---

---

今朝方はそのような夢を見ていた。実際にはその他にも夢を見ていたことを覚えている。しかし、それらの詳細についてはもう思い出せないでいる。今朝は少しばかり無意識の世界が落ち着いていた印象だ。それが今からの覚醒状態の意識にどのような影響を及ぼすのかを含め、色々と観察してみたい。フローニンゲン:2020/8/13(木)07:16

#### 6110. 変容的な学習と実践の要諦:非二元と自発性の観点より

時刻は午後7時半を迎えた。結局今日は、午後から雨が降ることはなく、晴天に恵まれた1日だった。どうやら雨が降り始める時間がずれ込み、雨は今日の深夜から降り始めるようだ。今日もまた30度を越すほどに気温が上がったが、一昨日や昨日よりも涼しさがあった。今は夕日が輝いているが、空には雲があり、それと同時にそよ風も吹いているので、涼しさがある。

先ほど夕食後の夕涼みとして、寝室の窓を大きく開け、涼しい風を浴びていた。明日からは天気が崩れ、それに伴って気温も下がる。それは秋の入り口を意味している。暑い夏を感じられるのは今日で最後だと思い、その感覚を存分に味わった。これで心置きなく秋を迎えることができる。まるで儀式をするかのように、このようにして日記を執筆することによって、季節の終わりと新たな季節の始まりを感じることは大切だろう。明日からの秋の始まりが楽しみだ。

今日は午前中にロイ・バスカーの“From Science to Emancipation: Alienation and the Actuality of Enlightenment”を読み終え、午後にはニコラス・ルーマンの“Introduction to Systems Theory”の再読を終えた。今日はまだ時間があるので、手持ちのバスカーの書籍としては最後の書籍となる“Critical Realism: Essential Readings”を読み始める。こちらの書籍は750ページほどの分量があり、大著のため、初読を終えるのに数日ほどかかるだろうか。

午前中の読書の際に、バスカーの指摘で大変重要なものを見つけた。それは、変容的な学習と実践の要諦を指摘するものだ。真に変容につながる学習や実践において重要なのは、新たな経験や知識を小さな自我に被せるのではなく、非二元の自己の基底に組み込んでいくことの大切さを暗に示す指摘だった。非二元の自己の基底に触れた形での学習や実践は、自己に解放をもたらし、継続的な自己変容をもたらす。

---

それでは、非二元の自己の基底に触れた形で学習や実践をするにはどうしたらいいのであろうか。重要なことは、自分の内側の声を聞くこと、いや内側の声を待たずして自発的に学習や実践が行われてしまうことが大事なのだ。もう自ずから開始されている自発的な学習や実践こそが、非二元の存在を豊かにする変容的な学習や実践と言えらるだろう。

私たちは何か学習や実践をする際に、小さな自我から生まれる作為的な言葉に耳を傾けがちである。それは「～のため」という言葉を伴うことが多く、そうした言葉に耳を傾けた瞬間に、そうした学習や実践は二元的な自己に基づいて行われるものになってしまう。そのような学習や実践では自己は深まらないのだ。

小さな自我の言葉にかき乱されないこと。そして、小さな自我に知識や経験を取り入れないこと。兎にも角にも、無条件に学習や実践に従事している自発的な自分を大切にしよう。それはまさに非二元の状態での学習や実践に従事していることに他らないのだから。

自発性の背後に非二元があり、非二元の中には自発性が必ずある。それを絶えず念頭に置き、常に自発的な学習と実践、及びあり方をこれからも続けていこう。フローニンゲン:2020/8/13(木)

19:52

### 6111. 夏の終わりを告げる雷雨:今朝方の夢

時刻は午前5時に近づこうとしている。今朝は午前4時過ぎに起床した。起床してすぐに、寝室の窓を大きく開けた。すると、とてもひんやりとした風が室内に流れ込んできて、大変心地良かった。その時間帯はまだ辺りは真っ暗であり、5時を迎えようとしている今もまだ外は真っ暗だ。起床していつものように身体を目覚めさせるヨガをゆっくりと行っていると、どこからともなく激しい雷の音が聞こえてきた。

天気予報では昨夜から雨が降る予定だったが、まだ雨は降っておらず、その雷の音を合図にして激しい雨が降ってきた。それは今もその激しさを失わずに降っている。闇の世界の中に煌く雷はどこか独特の美を放っていた。また、静寂な世界に鳴り響く雷の音にも固有の魅力があった。

---

今、雨脚はどんどん強まるばかりであり、この雷と雨は、夏の終わりを意味しているように感じる。激しい雨が地上の熱を冷ましている。今の気温は21度と涼しく、今日はほぼ1日中雨であり、気温は25度までしか上がらない。夏がすぐに終わってしまったことはどこか儚さを感じさせるが、私は涼しさや寒さを感じることを好んでいるので、少しばかり早い秋の到来を嬉しく思う。

今日をもってして本当に季節が転換点を迎えたようであり、明日からは最高気温が25度前後、最低気温が15度前後の日が続く。そして、明日から来週の週末まで、木曜日を除いて全ての日に雨マークが付されている。ここ最近暑かったので、ふとフィンランドについて思いを馳せることが多く、ヘルシンキの気候について改めて調べてみた。すると、ヘルシンキはフローニンゲンと異なり、一年を通じて雨が少なく、東京と比べると、年間の降水量はおよそ1/2.5ほどしかない。

私は北欧諸国の中でもフィンランドやノルウェーが好きであり、ノルウェーはEU国ではないので、欧州永住権が取得された後に仮にオランダからどこかの国に引っ越すのであれば、今のところフィンランドに住みたいと思っている。来年の夏は、フィンランドでの居住地候補を探す意味で、ヘルシンキ以外の街に滞在してみようと思う。

それでは夢について振り返り、今日もまた創作活動と読書に打ち込みたい。夢の中で私は、ちょうど昨日提出した原稿について、それを依頼してくれた2人の方とやり取りをしていた。その中で、どういうわけか、私は2人から叱れてしまうことがあった。私としてはできる限りの文章を執筆したつもりだったのだが、2人からお叱りを受けて、少し残念な気持ちになった。

次の夢の場面では、私は実際に通っていた中学校にいた。より具体的には、屋外のバスケットコートにいて、そこで2人の親友(HS & SI)と2対1をしていた。攻撃役が2人、守備役が1人の形で、私たちは和気藹々とそれを楽しんでいた。すると、部活の時間がやってきて、後輩たちを交えて、ハーフコートで3対3を始めた。ゲームの途中で私は、天に届きそうなぐらい高い放物線を描くスリーポイントシュートを放ち、それがゴールに決まった。シュートを放ったボールは青い光を発していて、青い光の筋が放物線を描く様はとても美しかった。また、放ったシュートはゴールのリングに全く触れずに、ネットに吸い込まれ、バスケットをしたことのある人であればわかるであろう、ボールがネットに直接触れるあのなんとも言えない快感を伴う音が辺りに鳴り響いた。今朝方はそのような夢を見ていた。

---

夢の振り返りを終えて顔を上げると、辺りはまだ真っ暗であり、遠くの方に雷の筋が何度も輝き、雷鳴が辺りに鳴り響き渡り続けている様子が改めて意識世界の中に入ってきた。フローニンゲン:

2020/8/14(金)05:20

### 6112. 本当の豊かさを求めて:フィンランドへの移住について

本当の豊かさとは何なのだろうか？雷雨が収まり、シトシトとした雨が降る様子を眺めながらそのようなことを考えていた。1人の人間として豊かに生きていくというのはどういう意味なのだろうか。そして、個人を超えて、豊かな社会とはどのようなものなのだろうか。さらには、豊かな地球とはどのようなものなのだろうか。豊かな個人と豊かな社会が共存し、豊かな地球を育んでいくあり方。それを探求したいと思う自分が強く芽生え始めている。

「ああ、やって来た」と思った。そろそろ私は生活拠点を換え、今の自分の関心事項によりふさわしい場所で生活を営む必要があるのかもしれないと思った。

今私が住んでいるフローニンゲンは本当に素晴らしい街である。今月からこの街での5年目の生活が始まったが、この街がこれまでの私にもたらしてくれた有形無形の恩恵は多大なものがある。今もなお、この街は私を養い、育み続けてくれている。だが、この街から離れ、今の自分が希求する生き方をより実現させてくれる場所に身を置く必要も感じている。

今朝方から、フィンランドについてばかり考えている。フィンランドにはたくさん素敵な街があるが、今の自分の知識と体験が乏しいために、どうしてもこれまで訪れたことのあるヘルシンキに関心が向かう。改めて調べてみて初めて知ったのだが、ヘルシンキはヨーロッパの首都の中で2番目に人口密度が低い都市とのことである。そもそも国としては、フィンランドはアイスランドとノルウェーに次ぐ人口密度の低い国である。

オランダに住み始めてから思うのだが、人口密度というのは、実は私たちが豊かな精神生活を送っていく上で大切な要素ではないかと思う。端的には、それは心のゆとりを大きく規定し、人口密度が低い場所に身を置くと、心の内側のスペースが大きくなる実感がある。それによって、自分の創作活動や探究活動に良い影響を与えていることがフローニンゲンで生活をしていて実感される。今の

---

私は、フローニンゲン以上により人口密度が低く、より自然豊かな場所で生活を営みたいという思いが生まれ始めている。

フィンランドの中でもヘルシンキ郊外はとても魅力的である。ヘルシンキ空港の近くでも自然が豊かであり、落ち着きがあることが数年前のアイノラ訪問で分かった。来年は、ヘルシンキ郊外をより散策してみようかと思う。数年前に訪れたアイノラの近くに、トゥースラ湖という場所があり、その湖畔に秘境的なホテル「Krapa(クラピ)」というものがあることを知った。来年はここに宿泊し、そこから色々と近場を散策してみようかと思う。

仮にフィンランドに長く滞在する計画を立てるのであれば、1週間ぐらいをトゥースラ湖の湖畔で過ごし、もう1週間をフィンランドの北端の街で過ごしてみるのもいいかもしれない。海の近くでの生活にも憧れるが、ヘンリー・デイヴィッド・ソローやシベリウスのように、湖畔での生活もとても魅力的だ。森の生き物たちの声に耳を傾け、森と湖から絶えず癒しを与えられる生活。そんな生活を思い描いている。

自然の豊かさと心の豊かさを求めて、真剣にフィンランド移住について考えてみようと思う。永住地をゆっくりと探していく時期に来ているように感じる。次の生活拠点に移動する日はそれほど遠くないかもしれない。今よりもさらにずっと静かな環境で、今よりもさらにずっと自然が豊かな環境で暮らしたい。それを通じて、人間とこの地球との共存について考えたい。お互いがより豊かになるあり方について考えたい。そのためには生活拠点を変えて、実際にそうしたあり方を日々深めていく生き方をしていく必要があるだろう。人間にとっての豊かさだけでなく、地球という惑星にとっての豊かさを含め、それを実際の生活を通じて探求していきたい。そうした探求的生き方をするためには、それに最もふさわしい生活拠点に身を置く必要があるだろう。フローニンゲン:2020/8/14(金)07:05

### 6113. 夏の終わりの扇風機の恩恵:フィンランドのピアノ曲

時刻は午前10時に近づきつつある。早朝から降っていた雷雨は止み、今とても穏やかな世界が広がっている。今はとても穏やかなのだが、午後にまた激しい雷雨が降るとのことである。今朝方起床した時に、昨夜から今日にかけて気温が下がってきたにもかかわらず、部屋に熱が溜まっているこ

---

とに気づいた。それに気づいたのは、寝室の窓を開けた時に冷たい風が流れ込んできて、それを浴びた後に書斎に移動したことによる。

先日、4階に引っ越してきたイェルに、4階は暑いだろうから、3階の倉庫にある扇風機を自由に使ってくれと伝えた。すると、イェルはすでに扇風機を2つほど持っている、「笑い」マークの入ったテキストメッセージで返信をしてくれた。倉庫にあるその扇風機は、今から4年前に4階に住んでいたサウジアラビア人の女学生が使っていたもので、彼女が引越しをする際に、私にくれたものだった。私はそれまでその扇風機を一切使わずに毎年の夏を過ごしていた。

今朝方室内に熱が溜まっていることに気づき、その熱を外に逃したいと思っていた時に、その扇風機を使ってみようと思いついた。もう4年間も使っておらず、倉庫に入れっぱなしになっていたのも、埃まみれになっており、扇風機ファンを含め、綺麗に掃除をした。そして、扇風機を回してみたところ、風が大変心地良く、早く使っておけば良かったと思ったほどである。

フローニンゲンも夏でも涼しいとは言え、8月の初旬には必ず猛暑日が1週間ほどあり、それを踏まえると、この4年間、クーラーどころか扇風機なしでよく夏を乗り切れたものだなどと改めて思った。ちょうど今日から秋の入り口に入ったため、扇風機を使うのは、部屋の熱を外に逃す本日のみになりそうだが、来年の夏はこの扇風機を活用させてもらおうと思う。

アーユルヴェーダのタイプ分類上、私は熱が溜まりやすい体質かと思うので、熱を逃す食を食べることも来年の夏から意識したい。季節にかかわらずトマトは毎晩1つ中くらいのものを食べている。そのトマトに海洋系のオーガニックの塩を振りかけて食べるととても美味しいのだ。来年の夏からは夏野菜を意識的に摂ってみよう。

4年後にフィンランド移住に向けて、来年の夏から毎年、フィンランドに一定期間滞在してみようと思うことについて今朝方の日記で書き留めていた。来年の夏は、湖畔の街ハメーンリンナに足を運んでみようかと思う。ここはシベリウスが生まれた街であり、とても雰囲気良さそう。この街には、ぜひ足を運んでみたい美術館がある。

Spotify経由で、シベリウスだけではなく、その他のフィンランドの作曲家のピアノ曲が収められたCDを見つけた。“An Anthology of Finnish Piano Music”というタイトルで、vol1からvol5までである。それ

---

---

らに合わせて、フィンランドの現代音楽についても関心を持ったので、“Sixth Sense: Finnish Contemporary Music for Piano”というCDも今日から聴いていこうかと思う。フィンランドへの思いをゆっくりと温めていき、4年後をめどに移住を実現させよう。フローニンゲン:2020/8/14(金)10:02

#### 6114. フィンランドへの移住に向けて

—ここだわ、私たちが住みついて素晴らしい生活をしようとしている場所は。色々面倒なこともいっぱいあるだろうけど…。これが私たちの住み着こうとしている場所なのよ—ムーミンママ

時刻は午後7時半に近づきつつある。今日から秋の入り口に入り、天気予報の通り涼しい1日となった。ここのところは本当に暑い日が続いていたので、久しぶりにこの涼しさを感じたぐらいだ。天気予報の通り、今日から秋に入り、明日からは涼しい日々が続く。それを知って少しホッとしている自分がいる。

やはり自分の取り組みに集中するためには、身が引き締まるぐらいの寒さがある方がちょうど良く、暑さがあるとどうしても心身が間延びしてしまう感があるのだ。それでも日々の取り組みには集中して取り組んでいたが、やはり涼しい時の心身の状態と比較すると差は歴然としているように思う。そんな心配も本日から無用になった。

今日の早朝に引き続き、午後からもフィンランドへの移住について考えていた。前々からフィンランドに生活拠点を設けようと考えていたが、その考えが突然強まったのが本日だった。それは何かの閾値を超えたかのようにやってきたものであり、それがどうして起こったのかについては説明ができない。それはまさに発達の非線形的な性質と似ている。

今日は時折フィンランドの作曲家が作ったピアノ曲を聴いていた。そのうちに、シベリウス後のフィンランド音楽について探究したいと思い、偶然ながらその意図に合致した“After Sibelius: Studies in Finnish Music”という書籍を見つけた。本書は、Routledge社という私がよくお世話になっている好きな出版社から出されたものでもあるため、今月の書籍の一括注文の際に、本書を購入しようと思う。ここ最近ではスクリャービンの曲を参考にして曲の原型モデルを作っていたが、毎日2曲作るうちのモデルの1つをシベリウスのものにしようと思う。近々、シベリウス以外のフィンランドの作曲家の楽譜も購入したい。



---

改めてフィンランドについて調べてみると、その国土面積は日本の90%程度小さいだけなのだが、フィンランドの人口は日本のわずか5%ほどであることに驚いた。それによって、人口密度は桁違いに異なる。そこからおそらく、国民の心のスペースも随分と違うだろうと思われた。実際にそれは人々の生き方に滲み出ているように思う。

今後の自分の取り組みを深めていく際には、心のゆとりはより一層大切になる。もちろんフローニンゲンでの生活は本当にゆったりしていて、心のゆとりは多大なものなのだが、今の私はそれをさらに広げる必要性を感じているようなのだ。今すぐにではなく、4年後を目安にフィンランドに移住しようかと思う。来年か再来年に欧州永住権の申請ができるため、それ以降はEU圏内であればどこにでも自由に住むことができる。

ここからの4年間は、フィンランドの探索を兼ねて、毎年の夏をフィンランドで過ごそう。フィンランドでの家は湖畔の近くに、ゆったりとした広いサウナ付きの家に住みたい。たくさんの本を置ける書斎があって、書斎の窓の外には湖と森が広がっている。

北欧に近いオランダで、冬の厳しさに慣れてきたこともあり、もちろん本場の北欧の冬の厳しさはさらに過酷なものだと思うが、そうした環境面での適応も速やかにいくのではないかと思う。冬の厳しさあつての北欧の魅力であり、そこにまた生活上の別種の豊かさと醍醐味がある。フローニンゲン：

2020/8/14(金) 19:31

#### 6115. 今朝方の夢を受けて1年振りに行ってみたこと:メタディスコースの構築

時刻は午後7時半を迎えたが、今朝方の夢についてふと思い出したことがあった。夢の中で私は、ベッドの上に横たわって、目を開けていた。ベッドの上には小中高時代の友人がいて、私の足元で私の右足の足の裏の匂いを嗅いでいた。それはちょっとギョツとする行為のように思えるかもしれないが、夢の中の私は別になんとも思っていなかった。

すると彼が、「いい香りだね。でも足を石鹸で洗ったほうがいいのかもよ」と述べた。すると、私の左隣には女性の知人がいて、彼女は笑いながら頷いていた。彼女のその様子を見て、久しぶりに足を洗おうかと思った。とは言え、夢の中の私は、自分の足の裏の香りはハチミツと醤油せんべい——よ

---

り厳密には「ポタポタ焼き」——を混ぜた良い香りだと思っていたし、何よりもこの1年間石鹸やシャンプーを使わない生活を徹底させていて、それを崩したくなかった。そのような夢を見ていた。

現実世界の私もまた鼻が利く。日々の食生活を気をつけているため、腸内環境もすこぶる良く、それによって足の裏も含めて、体臭も良いように思う。しかしそれでも今日は実際に、1年振りにシャンプーで足を洗った。何かあったときのために使うかもしれないと思って取っていた使いかけのシャンプーを棚から取り出し、それを用以て足を洗った。夢の中の登場人物の発言を受けて、実際に足を洗ってみることにした自分に対しておかしくて笑ってしまった。繰り返しになるが、別に嫌な匂いではなく、むしろ夢の自分が描写したような甘い香りが足から漂っているぐらいだったのだが、先日明恵上人のことを知り、明恵上人が夢から得られた示唆を現実世界での行動に活かしている姿を知って、1年振りに足を洗ってみた次第である。

今日は早朝に雷が伴う雨が降ったが、天気予報を裏切る形で、午後からは晴れ間も広がった。雲が少ない時間帯もあり、その時にキノコを天日干しした。先日は椎茸を買うことをせずに、代わりにマッシュルームを購入したのだが、マッシュルームは椎茸よりも少し傷むのが早い印象だ。仮に椎茸であったとしても、天日干ししたキノコ類を冷蔵庫で保存する際には、キッチンペーパーに包んだキノコを単にジップロックに入れるだけではなく、ジップロックをプラスチックの袋に入れて湿気が溜まらないようにしたい。

今日も読書が捗った。おそらく今朝は午前4時に起床していたことも影響しているだろう。読書に充てる時間が純粋に増えていたのだ。おかげで、ロイ・バスカーの全ての書籍を読み終えた。明日からは、ハーバート・マルクーゼの“Art and Liberation”の再読をしたい。

本日の読書を通じて、ハーバースマスはルーマンに対して建設的な批判を投げ、ルーマンもハーバースマスに対して建設的な批判を投げかけており、バスカーはハーバースマスやスラヴォイ・ジジエックに対して建設的な批判を投げかけていることを興味深く思った。さらに彼らの相互的批判的なディスコースを追っていくと、そのテーマに関するメタディスコースが自分の内側に構築されていくのを感じた。おそらくそれが自分の思想体系を構築していく時に重要な感覚なのだろう。複数の哲学者の思想体系を横断し、それらを単に水平方向に横断するのではなく、垂直方向に飛躍させる形で自分

---

の思想体系をメタ次元で構築していく。その感覚を忘れずに、明日からも少しずつメタディスコースの構築実践を継続させていく。フローニンゲン:2020/8/14(金)19:43

### 6116. 半法則(demi-laws):厚生経済学への関心

時刻は午前6時半を迎えようとしている。今朝は空にうっすらとした雲が浮かんでいて、朝日を拝むことはできない。今日の最高気温は25度、最低気温は17度と涼しい1日となるようだ。また、今日は午後から雷を伴う雨が降るとのことである。

昨日の午後は結局雨が降ることがなかった。私としては雨によってもう少し地表の熱が逃れて欲しいと思っているので、今日はちゃんと雨が降って欲しい。明日もまた午後から雨が降るとの予報が出ているので、買い物は午前中に済ませておこう。

昨日ロイ・バスカーの書籍を読んでいると、日々日記を通じて、日常世界に溢れる現象に対して普遍的な法則を見つけようとしているというよりも、絶えず変化する自己と世界の中において、ある特定の条件下における自己に当てはまる「半法則(demi-laws)」を見つけようとしていることに気付かされた。自然科学や社会科学における科学法則も、それは決して普遍的なものではなく—例えばニュートンの物理法則も、アインシュタインによってそれが普遍的な法則ではないことが証明された—、部分的に当てはまる半法則なのだ。そのあたりの混同をしないように注意したい。

昨日はふと、アテネで訪れた大型書店の記憶が蘇ってきた。その書店では、なぜかレーニンの書籍が多く平積みされていたことが印象的だった。ギリシャという国は今、革命を志向しているのだろうか。ひょっとしたらそれはギリシャのみならず、世界は革命を密かに志向しているのかもしれない。なんらかの変容は確かに急務のように思える。

上述のように、目には見えない半法則としての社会法則や社会規則により意識を向けていこう。それがどのような要因や意図で生み出されているのものなのかを観察し、それをどのように変えることができるのかを考えていく。それはつまり、半法則によって生み出されている構造の変容を実現させていくことに他ならない。

---

そのようなことを考えていると、「厚生経済学(welfare economics)」という経済学の一分野に関心を持った。厚生経済学とは、既存の経済システムや経済政策を批判的に検討し、人々の福祉の観点からその機能を改善するために、代替的な経済システムや経済政策の設計を企てる経済学の一分野である、という説明があった。まさに厚生経済学は、経済における半法則と構造を批判的に検討するものであり、同時に私に関心を絶えず寄せている人間の解放の観点からも、非常に興味深い学問分野だと思った。フランクフルト学派が提唱した批判理論と合わせて、厚生経済学も自分なりに学んで行こうかと思う。今月に購入する予定の書籍はすでに決めているので、来月以降に厚生経済学に関する書籍を購入することを検討しよう。フローニンゲン:2020/8/15(土)06:38

### 6117. “underlaboring”をしていく試みと今朝方の夢

時刻は午前6時半を過ぎた。辺りはとても穏やかであり、週末の始まりの平穏さを感じる。今はまだ雨が降っておらず、雨は午後から降るようであり、明日に買い物をまとめて行うよりも、今日の昼前に街の中心部にジョギングがてら行き、オーガニックスーパーで必要なものを買ってきてもいいかもしれない。少しばかり天気の様子を見よう。

昨日、無事に14冊のロイ・バスカーの書籍を読み終えた。昨日は改めて、成人発達理論やインテグラル理論を活用することに際して、それが誤った形で活用されることを防ぐための“underlaboring”を行なっていくことが一つ自分に課せられた大切な役割であるように思えた。“underlaboring”というのは元々はジョン・ロックが提唱した言葉であり、それは思想的・実践的な不純物や歪みを取り除いていくことを意味する。私たちは知らず知らず不純物のある食べ物を口にしてしまいがちであるのと同じように、不純物が混入した学習や実践を行ってしまいがちである。そうした不純物は学習や実践を停滞させ、さらには誤った方向に導きかねないものであるがゆえに、そうした不純物を“underlaboring”していく試みは大切になるだろう。

それでは今朝方の夢について振り返り、今日も創作活動と読書に励んで行こう。夢の中で私は、大学時代のサークルの先輩2人と旅館の畳部屋で話をしていて、その旅館はおそらく日本のどこかにあるものだ。片一方の先輩が、私に経済学か何かを教えてくれとお願いをしてくれたので、私はそれを引き受けた。どうやら仕事で経済学の基礎的な概念や理論を用いる必要が出てきたらしく、そうした基礎を教えて欲しいということだった。またもう一方の先輩からは、経済学とは違う学問領域につ

---

いて教えて欲しいという依頼を受けた。私は何かの役に立てるのならと思って、嬉々とした表情を浮かべて先輩からの依頼を引き受けた。

次の夢の場面もまた旅館の中だった。雰囲気からすると、1つ前の夢の場面の旅館とは若干異なっているようだった。その旅館はとても広く、歴史がありながらにして古さはなく、むしろ新しさと清潔感に溢れていた。起床してから昼食までの時間は自由時間であり、私は旅館の中でゆっくりとしていた。そこでふと、同じタイミングで宿泊しているある知人の方とゆっくり話したいと思った。その方もまた独りであることを好むタイプであることを知っていたので、迷惑にならないように、相手の気持ちを汲み取りながら話をさせてもらうように依頼をしようと思った。

旅館の大広間を通り過ぎようとしたときに、ちょうどそこにその方が座っていた。その他にも周りには何人かの人たちがいて、彼らは思い思いにお互いに話していたのだが、その方はやはり独りだった。独りではあったが表情は明るく、どこか自分の内側の声を静かに聞いているようだった。すると、その方は近くにいたお坊さんにゆっくり話したいと述べ、ちょうどそのお坊さんは忙しかつたので、対話相手として私と話をするように勧めてくれた。そこからその方と私は場所を移動し、こじんまりとした日本庭園が見える軒先に移動し、そこでゆっくりと対話することにした。フローニンゲン：  
2020/8/15(土)07:07

### 6118. 一次元的世界における芸術

時刻は午後7時半を迎えた。今、穏やかな夕日がフローニンゲンの街に降り注いでいる。昨日から秋の入り口に入り、夕日がより穏やかになったように感じる。光の強さがすっかりと秋のそれなのだ。

本日は昨日と同様に、天気予報に裏切られた。結局今日は雨が一滴も降らなかった。本来はそれを喜ぶべきところなのだが、さらに地表を涼しくするために、私は雨を望んでいた。今日の深夜と明日の午後には雨が降ると予報が出ているが、それが当たるのかどうかも今となっては怪しい。明日は雨が降っていない時間帯を見計らって、街の中心部のオーガニックスーパーに買い物に出かけようと思う。

---

今日は、ハーバート・マルクーゼの“Art and Liberation”の再読を始めた。初読の時には見逃していたことが随所にあり、また初読時に比べて随分と本書の内容が頭に入ってきたように思う。それは初読の時と比べて自分自身の変容を遂げたことの現れであろうし、マルクーゼが本書で行っている主張が今の私の関心に響いていることの現れだろう。

自己の具体的特異性 (concrete singularity) を具現化させる芸術は、マルクーゼが述べる画一化された「一次元的世界 (one-dimensional world)」の変容に資する。しかし注意しなければならないのは、この現代社会においては芸術までもが一次元的なものの支配下に置かれ、一次元的なものになっていないかということである。つまり、本来社会の画一化と抑圧を解放させることに力を発揮する役割を果たしていた芸術が、画一化された社会の中で物質消費対象とみなされ、商品化され、それによって芸術そのものが画一化されることによって、社会を解放させる力が発揮できなくなってしまっている可能性はないかということである。

既存の社会構造から脱却することに力を発揮していた芸術が、既存の社会構造の枠組みの中に組み込まれ、消費され、画一化されることによって、既存の社会構造をより強固なものにしてしまうことへの危惧がある。社会を変容させ、個人に解放をもたらす芸術の本来の性質を取り戻すこと。芸術の本来の性質を覆っている諸々の社会的不純物を“underlaboring”していくこと。そこに焦点を当てて実践をしていこう。

治癒・変容・解放の担い手としての芸術家の役割。それについても合わせて考えていた。美学について様々な観点から学ぶことによって、芸術と芸術家の役割についてこれまで見落としていた大切なものをいくつも見つける。この社会に治癒・変容・解放をもたらす芸術と芸術家の意義について、ここからまた多角的に考察を深めていこう。フローニンゲン:2020/8/15(土) 19:35

### 6119. フィンランドの作曲家の楽譜を見つけて

時刻は午前7時を迎えた。穏やかな日曜日の朝の世界が目の前に広がっている。今朝は少しばかりうっすらとした雲が空にかかっている、輝くような朝日を拝むことはできない。しかしその分とても涼しい。一昨日から秋に入ったこともあり、今日は地上の熱もどこかに逃げていてとても涼しげだ。昨夜に少し雨が降ったことも影響しているだろう。

---

天気予報を確認すると、昨日の時の予報から少し変化があり、昼から雨が降るのではなく、午後少し経ってから雨が降るようだ。今日は買い物に出かける必要があるので、昼前に街の中心部のオーガニックスーパーにジョギングがてら向かいたい。今日は最高気温が28度まで上がるらしいが、明日以降はどんどん気温が下がっていき、来週の日曜日にはもう最高気温が21度、最低気温が12度という予報が出ている。それは相当に涼しいだろう。

ここ数日、フィンランドへ移住することについてよく考えていた。その中で、フィンランドの作曲家の曲を参考にして曲を作っていこうという気持ちが新たに芽生え、“Finnish Piano Pieces”という楽譜を購入していたことを思い出した。しかし、楽譜置き場を探してもなかなか見つからなかった。実家に持って帰って母に貸したのかなと思っていたところ、書斎の机の横の椅子に積み上げられた楽譜の方を見てみると、その下の方にその楽譜を発見し、とても嬉しく思った。

早速中身を確認してみたところ、それを購入した日付が楽譜の最初のページに書き込まれていて、それはアイノラのシベリウス博物館で2018年の8月31日に購入したものであることがわかった。ちょうど2年前の今頃にアイノラを訪れていたのだ。この楽譜を購入し、ヘルシンキのホテルでそれを参考にしながら少し曲を作っていた思い出が蘇ってきた。ここからまたこの楽譜を参考にして曲の原型モデルを作り、それをもとに自分の曲を作っていこうと思う。

フィンランドの自然に囲まれた暮らしに対して少しずつ思いが強まる。オランダも都市部においても緑は多いが、フィンランド人の自然を愛する気持ちゆえか、フィンランドの方がさらに緑が多い印象である。今のところヘルシンキ郊外を生活地の第一候補とし、郊外に良さそうな地域はないかを探してみるつもりだ。フィンランドに移住するにはアパートではなく、一軒家に住むことにしたい。賃貸にするか購入するかはまだ分からず、とりあえず森が近くにあつて、湖のすぐそばの家に住みたいと思う。生活拠点を探しに行くことを兼ねたフィンランド旅行を来年の夏から毎年行っていこうと思うが、夏だけではなく、フィンランドの冬も体験しておいた方がいいかもしれないとふと思った。

今年の年末年始は、今のところ暖かいマヨルカ島で過ごそうと思っていたが、あえて極寒のフィンランドで過ごすのもいいかもしれない。雪が積もってスーツケースが引けなくなってしまうことだけが心配だが、最寄駅から宿泊先までそれほど遠くない場所を選べば、スーツケースを持ち上げて運べばいいのでその問題は大きなことではないかもしれない。秋の一時帰国が意外と早くに迫っている

---

のと同じように、年末年始もあつという間にやってくるだろう。今年の年末年始をどこで過ごすのか、そろそろ真剣に検討していこう。フローニンゲン:2020/8/16(日)07:19

## 6120. 今朝方の夢

今朝は風がほとんどなく、とても穏やかだ。近くで小鳥たちが静かに鳴き声を上げている。

それでは、今朝方の夢について振り返り、今日もまた創作活動と読書に打ち込もうと思う。昨日の読書では、ハーバート・マルクーゼが執筆した芸術と人間解放に関する書籍を読んだ。今日は、群衆心理学に関する書籍を読み進めていこうと思う。

夢の中で私は、小中学校時代に過ごしていた社宅の自室にいた。そこでスーツケースの荷解きをしていた。その前にどこに出かけていたのかは不明であり、その旅が国外なのか国内なのかもわからなかった。いずれにせよ、荷物はそれほど多くなく、衣類はほとんどないような状態であり、その代わりに小物類がスーツケースに多く入っていた。

それらを取り出していたところ、小中学校時代の友人(RS)が自分の部屋にやって来て、私に話しかけてきた。彼は笑顔を浮かべながら、私に何かを差し出してくれた。どうやらそれはプレゼントのようであり、何のプレゼントかわからなかったが、私はそれを有り難く受け取った。その中身が何だったかはもう覚えていないが、夢の中の私はプレゼントの中身を見て喜んだのを覚えている。そこからまだ荷解きを続けていて、スーツケースの下の方からクレジットカードのようなものが出て来た。それは、空港のラウンジを無料で利用できるカードであり、残念ながらそのカードは数カ所折れ曲がっていた。しかし、そのカードの再発行は無料で行えるので、それをすぐに行おうと思った。

するとそこで夢の場面が変わった。次の夢の場面では、私はZoomを用いたセミナーを開催することになっていた。開始時刻はオランダの時間の午後3時からであり、開始まであと1時間半ほどあったので仮眠を取ることにした。仮眠から目覚めると、なんとセミナー開始の5分前だった。

私はまだ身支度をしておらず、とりあえず急いで洗面所に向かった。セミナーの協働開催者の方がすでに色々と準備をしてくれていたのでものを抜いてしまったのかもしれない。洗面所で髭を剃り、そこからスーツに着替えたが、ネクタイを結ぶ時間まではなかった。私はそのままセミナーに参加した



---

が、協働者の方がセミナーの司会を務めてくださり、まずは参加者から質問を募ることにした。そこで、私の知り合いの参加者の方が質問をした。私はまだビデオモードをオンにすることをせずに、その方の質問に答えながらネクタイを結ぶことにした。ネクタイの色は覚えていないが、シャツはピンクだったことを覚えている。今朝方はそのような夢を見ていた。実際にはもう少し細かな描写があったり、違う場面があったことを覚えている。フローニンゲン:2020/8/16(日)07:37